

あせ 家康、焦る

—資料館のお宝紹介—

喬木村歴史民俗資料館長 青木 隆幸

資料館に、家康が知久頼氏に送った天正十年七月の本領安堵状がありました。信長が死去してわずか二月半後です。「安堵」は土地支配を認めること。飯伊では珍しい家康直筆書状です。「家康伊賀越え」の際、頼氏が護衛したこと、七月初めの家康甲府侵攻の時、頼氏が伊那の武士を率い活躍したので安堵状が出されたと言います。

だが、疑問があります。神之峰合戦で敗れた13歳の頼氏は、以後28年間浪人です。突然、多数の軍勢を率いて出陣するのは無理。「伊賀越え」にも随行していないようです。頼氏と家康は旧知

の仲とされますが、この年の五月が初対面。謎ばかりですね。

手がかりは、天正十年七月の家康を「神君」のイメージでみないことです。信長なき後の信州は、東に北条、北に上杉、南に家康。誰一人、「明日の自分」を思い描けない段階です。実は、北条も上杉も家康も、この時期に「安堵状」を乱発しています。皆、味方が欲しいのです。藁にもすがる気持ち、「根拠のない約束手形」攻勢です。「偉大な家康の書状だから効力を発揮した」はただの思い込み。もがき、焦り、祈る気持ちで二枚二枚を認めています。39歳。

史料をけなすものではありません。「明日が見えない今日」を、うろたえつつ全力で駆けていく、その姿が伝わってくるのです。けなげで、愛おしく感じます。「東照大権現様」よりよほど人間味溢れていて面白い。一方頼氏にすれば、書状一枚で何が安堵されるわけでもない。存亡をかけた戦いは、ここからスタートです。

学校では歴史は暗記科目で退屈ですが、当事者の気持ち想像すると面白くなります。どの史料にも、生まれる時に託された想いがあります。「史料たちの声を聴き、皆さんに届けたい」、そんな気持ちで展示のリニューアル、解説、講座に取り組んでいます。

